

《研究報告》

メタ倫理学における内在主義と外在主義

本研究報告は、京都大学倫理学研究室在籍の大学院生を中心に 2001 年の秋ごろから行なわれてきた研究会での発表を土台にしています。これまでこの研究会では、二十世紀の英米圏のメタ倫理学の主要な論文を収録している *Moral Discourse & Practice*¹ をテキストとして、道徳と行為の理由の関係、道徳的実在論といったテーマを中心に研究してきました。今回の研究報告では、実践的推論の性質、とくに「道徳は行為する理由を与えるか」という道徳と行為の理由の関係についての議論に焦点を絞り、内在主義と外在主義という対立する立場を明確な形で紹介することに努めました。まず、神崎宣次と佐々木拓の「内在主義と外在主義の区別について」が内在主義と外在主義の区別について、ステイヴン・ダーウォルの論文「理由、動機、道徳の要請」を下敷きにして概説し、その主な論点を明らかにしたあと、理性と欲求(あるいは理由と動機)についてヒュームの立場をとるバーナード・ウィリアムズが内在主義と外在主義の区別について論じた代表的論文「内在的理由と外在的理由」を児玉聡が紹介し、さらにそのウィリアムズの議論をカント的立場から批判するクリスティン・コ

¹ Stephen Darwall, Allan Gibbard, Peter Railton, *Moral Discourse & Practice: Some Philosophical Approaches*, Oxford University Press, 1997.

コースガードの二本の論文「実践理性についての懐疑」「反省の権威」をそれぞれ森芳周と奥田太郎が紹介しています。相互の読み合わせと原稿の修正には上記の執筆者のほかに、林芳紀、島内明文も参加しています。

まだまだ基礎文献の収集と読解という段階で研究不足の感は否めませんが、日本では1970年代以降の英米圏のメタ倫理学の体系的な紹介や議論が十分になされていないことを鑑み、ここにとりあえずの成果を発表する次第です。今後の議論の活性化に、本報告がいくらかでも貢献できれば幸いです。

内容

1. 序：「内在主義と外在主義の区別について」 神崎宣次、佐々木拓
2. バーナード・ウィリアムズ「内在的理由と外在的理由」 児玉聡
3. クリスティン・コースガード「実践理性についての懐疑」 森芳周
4. クリスティン・コースガード「反省の権威」 奥田太郎